

ようこそ地獄のような教室へ

ラズベリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

持っていない、不運なある少女がある特殊な学校高度育成高等学校に入学する。

やつと幸運なことが起きたと思い入学するもどうやらこの学校はただの学校じゃ無いらしく、後々後悔することとなる。

この学校に入り少女はどんな事を思い、考えるのか。

さようなら不運だった生活。そしてようこそ地獄のような教室へ。

目次

| | |
|---------|----|
| 不運な私 | 1 |
| バスでの出来事 | 4 |
| 教室での出来事 | 11 |
| 目覚め | 24 |

不運な私

突然だけどあることについて考えて欲しい

問い 人々は平等であるか否か

私は、答えは否だと思う。

この世の中は理不尽だらけだ。例えば、そう。権力が有る人や無い人、お金が有る人や無い人、病気を患っている人や患って無い人、運が有る人や無い人など：

少し考えるだけで沢山の事を思いつく。

私は全くこの世の中が平等だとは思わない。

理不尽で不平等な世界なんだと思う。

何故なら、そうでなければ私に今まで起きた事の説明がつかないから。

私はつくづく持ってない。持ってない人なんだ。

何をやっても、どれだけ頑張ってもダメな方に行ってしまう。

ここで私の過去について少しだけ話そうかな。不幸な出来事の中の1つ。私は小学校の運動会の時リレーの選手になった。沢山練習して、みんなの役に立てるように頑張った。沢山沢山練習して、私は学年1位の記録を出せるようになった。だけど、入場してスタート位置につく間に私の足は肉離れしてしまい、走る事が出来なくなった。そして私は結局リレー選手を辞退することになった。

最悪な思い出だ。他にもまだまだいっぱいある。これはまだまだ序の口の方だよ。

何でかな？いつもいつも頑張って努力してるのに：私は今までずっと人一倍努力してきた。努力した時間と量は誰にも負けない自信があるのに、何をやっても失敗する。いつも最悪な状況になる？神様、どうして：？？どうして私にこんな酷い事を沢山するの？

何もしてないだけでも不運な事が次々にやってくる。

もう、持ってなさすぎて逆に笑えてくるよ。

何かを成功しても結果的に最悪な方向に進んでしまうんだ。

あの時だってそう。良かれと思ってした事が最悪の形になって

帰ってきた。

もう、何でなのかな？分からないよ。

そんな私だが、人生で初めて嬉しいと思えるような出来事があった。政府が作った名門高校、高度育成高等学校に入学する事が出来たんだ。

希望する就職先や進学先にほぼ100%応えるというまさに夢のような学校。

合格だと知った時は凄く凄く嬉しかった。やっと、やっと努力が実ったんだって。やっと幸運なことが起きたんだって。嬉しすぎて涙が出ちゃったぐらいだった。

そして私は今日、入学式に向かうためにバスに乗ろうとしていた。だけど、私はこの時思いもよらなかつた。これからの学校生活が夢のような時間になるのでは無く地獄のような生活になることなんて。あの時、合格だと知った時、何で私は疑問に思わなかつたんだろう。

『何で私にこんな幸運なことがやってくるのか。』

と何で思わなかつたのか。

私は後に後悔することになる。

設定

主人公 不留美 優

性別 女

容姿 黒髪美少女。髪の長さは腰にかかるぐらい。瞳は赤色。

性格 普段は優しいが怒るとものすごく怖い。持ってない不運な少女だが窮地に立たされた時、凄い力を発揮する。

本当は努力家。目立たないようにしている

本当は頭も運動神経もめちやくちや良い。が、何をやってもダメな方への行ってしまいうので最近は何りの人に迷惑をかけるないように出来るだけ何もしないで地味で目立たないように生活している。

高度育成高等学校学生データベース

氏名 不留美 優

クラス 1年Dクラス

誕生日 12月1日

学力 C

身体能力 C

判断力 A+

協調性 C

面接官からのコメント

学力、身体能力は平均だが、判断力が異常に高い生徒。面接試験でも特に問題点は見られなかった為、本来ならCクラスとするが別除資料のことを踏まえDクラス配属とする

バスでの出来事

4月。私は入学式に向かうためにバス停でバスを待っていた。バス、座れると良いな。朝、このバス停に来るまでに何か急にお腹が痛くなつてきちやっただよね…:

ズキンズキンツと、体を動かす度に腹部が痛くなる

ううツ、まじで痛い…。はあ、ついてないなあ。せつかく今日入学式があつて友達とか作れるかもしれないのに体調が悪かつたらなあ…:

私、なんか変なもの食べたかな？

そう思い、今朝食べた物を振り返つてみるが特に変な物を食べた記憶はない

でもまあ、いつもに比べればまだ可愛いもんか。私が我慢すれば良いだけだしね。それに早急、薬を飲んだし大人しくしてればその内治るはず

そう思っているとバスがやつてきた

席空いていますように

そう願いながらバスに入ると丁度1席だけ席が空いていた。あ、でもこの席：優先席だ…：座つて良いかな…？

でもお腹すごく痛いし…：それに金髪のガタイの良い男の人、えつと制服が同じだから多分同じ学校に入学するのかな？まあその人も座つてるし…：いいかな。うん。もしお婆さんとかが来たら譲る形にしよう。というかめつちやお腹痛い…。はあ、最悪。早く治つてよ…:

そう思いながら私は席に座った――

その時隣に座っている金髪の男の人が此方を見て少し驚いていたような気がしたんだけど多分気のせいだよね…？

そして、しばらくしてバスが混み始めた頃――

ズキンズキンツズキンズキンツ

私のお腹の痛みは一向に治らないどころか、何故か更に悪化し、物凄く痛くなってきた

腹部が針にズキズキと刺されているような物凄い痛み

まじで痛い。なんで治らないの、え、私薬飲んだよ？なんで直らないの？もしかしてあの薬全く聞いてない？

：今度からは自分によく効く薬ちゃんと選んで持ち歩こう…

でも座れただけよかったかな

そう思っているとお婆さんが杖をつきながら少し辛そうにバスに乗ってきた

あ、お婆さんだ…ごめん、ごめんなさい…最初は来たら譲ろうと思っただけでお腹治る気配が全くしない…すみません…今はまだ少し立つの辛いです…もう少し、良くなったら席譲ろう

ごめんね、お婆さん

そう思っただけで申し訳なさそうにしていると急に声が聞こえた

「ちよつと席を譲ってあげようと思わないの？」

私に言われた…？

ドキッと心臓が鳴り、声が出た方を慌てて見ると其処にはOL風の女性が隣の男に向かって言っていた

私じゃなかったか…

私は少しだけ安堵したその時、

「その君、お婆さんが困っているのが見えないの？」

もう一度彼女は大声でそう言い、バスの人達の視線がこちらに集まってくる

「実にクレイジーな質問だね、レディー」

隣の男はそう言いながらニヤリと笑い、足を組みなおした。

「何故この私が、老婆に席を譲らなければならぬんだい？どこにも理由はないが」

「君が座ってる席は優先席よ。お年寄りに席を譲るのは当然でしょう？」

「理解できないね。優先席はあくまで優先席であって法的な義務はどこにも存在しない。この席を譲るか否か。それは今現在この席を有

している私が判断することなのだよ。若者だから席を譲る？ 実にナンセンスな考え方だ」

そして彼はそのまま話を続ける

「私は健全な若者だ。確かに立つことに何の不自由も感じない。しかし、座っているときよりも体力を消耗することは明らかだ。意味も無く無益なことをするつもりにはなれないねえ。それとも、チップを恵んでくれるとでも言うのかな？」

この人何か凄い……

「そ、それが目上の人に対する態度!？」

「目上？ 君や老婆が私よりも長い人生を送っていることは一目瞭然だ。そこに疑問を挟む余地も無い。だが、目上とは立場が上の人間を指して用いる言葉だ。それに君にも問題がある。歳の差があるとしても生意気極まりない実にふてぶてしい態度ではないかな？」

「くツ…… それじゃあ隣の貴女でいいわ。席を譲りなさいよ」

隣の彼に何を言っても通じない事がわかったのか今度は隣にいる私に向かって言った。そして今度は私に視線が集まっていく

はあ、まじか…… 今お腹めっちゃ痛いんだけどな……

でも、仕方ないよね。お婆さんが辛そうにしているのは事実だし……

それに、これ以上バスの空気を最悪にしたくないし。

今度からはもつと体調管理に気をつけよう

そう思っけて口を開こうと唇を動かした時、OL風の女性は私が直ぐ席を譲らない事に苛立ちを感じたのか大声で言葉を解き放った

「良いわよね？ 若者がお婆さんに席を譲るのは当然の義務よ！ 少し具合を悪そうにしてるけどまだ若いんだからそれぐらい平気よね？ というかそれさえ出来ないと言う事なら貴女はバスに2度と乗らないで欲しいわ。それと、貴女を育てた両親の顔も見てみたいわ。きつと自己中心的な親なんでしょうね。」

私は彼女の言い分に少し苛立ちを思いながらも出来る限り笑顔を作っけて具合が悪く見えないようにしながらお婆さんに向かって言った

「……そうですね、どうぞお婆さん。すぐに譲る事が出来なくてすいません」

そして私は手すりに捕まってゆっくり立ち、席を離れて手すりのあるドアの近くまで行き、手すりにもたれかかった

うえこの体制辛いなあ。でもたぶんあと少しで学校に着くよね。着いたら保健室に行こうかな。それまでの辛抱だから頑張ろう

そう思っていると何故かバス中の人々がOL風の女性に向かって冷やかな視線を向けた

「な、なに!？」

「ははははっ!レディー、君は実に愚かだねえ」

「は、はあ?何を言っているの!?!私は別に間違った事はしていないわ!」

「本当にそう思うのかい?君は私が席を譲る気が無いと分かったとたん黒髪ガールに無理やり席を譲れと脅迫しただろう?」

え?

「何を言っているの?私は脅迫なんかしていないわ!!変な妄想しないでくれる?」

とつても申し訳ないんだけどもう少しだけでいいから声のボリュームを小さくしてくれると嬉しいな……

そう密かにOL風の女性に対して思っていると不意に優先座席に座っている男が私を話題に出して言ってきた

「では君は黒髪ガールを見て何も思わないのかい?」

すると再び私に視線が集まる

え、と?

「別に手すりにもたれかかっているだけじゃない」

OL風の女性は私を睨みながら答えた

そんな彼女に対して優先席に座っている男はやれやれと言った感じで説明し出した

「見るからに具合が悪そうに見えるだろう?顔色が悪く、手すりを使わないと立てないようだった。また先ほど歩いている時は何度もよろけていた。相当具合が悪いのだろうねえ。恐らく君以外のこのバ

スに乗客している者は皆わかっているはずだ。そんな彼女を君は無
理やり若者だから平気だと勝手に思い込み無理やり席を譲れと言っ
た。先程君は老婆がいるから席を譲れと言っていたが黒髪ガールも
また席に座る資格があると思うがねえ。レディーは黒髪ガールが何
らかの重病を抱えているかもしれないという事を考えなかったのか
い？これのどこに何もしていないと言い切れるのかな？実にナンセ
ンスな考えだねえ。」

OL風の女性は口を開けたり閉じたりしながら私と優先席に座つ
ている男を交互に睨み付けた

え、私そんな感じになつてた？申し訳ない…

「えつとあの、私のことは別に気にしないでください。もう元気になる
りましたから！」

出来るだけ精一杯に笑顔を作り、手すりにもたれかかるのはやめて
自力で立ちながら私は言った

すると優先席に座っている男は何故か呆れた顔をした

「黒髪ガールも黒髪ガールだ。君も相変わらずだねえ不留美ガール」

……え？何故この人は私の名前を知ってるの!?!… まあ、一応
言われたのは苗字だったけど… って、そんな場合じゃないよ！

え、えーと、ん？どつかでこの人と会ったことあつたっけ？んん
ん？

…ダメだ、お腹が痛くて脳があまり機能しないよ…

それでも私は必死に思い出そうと頑張っていると、彼はふつと笑い
そのまた黙ってしまった

するとバスが学校に着いたみたいでバスが止まった

プシュー

ドアが空き、次々と降りる予定だった人が降りて行く

ふう、取り敢えず金髪の男の事は後で考えよう。うん。そして頑
張って歩こう。

そう思つて取り敢えずバスから降りた。
すると、

「ねえねえ大丈夫?」

金髪の可愛い少女に話しかけられた

・・・なんか、今日金髪の人と話すこと多くないかな?話しかけてくれる事自体はとっても嬉しいんだけど

そう思いながらも返事をした

「あ、うん。なんとか大丈夫だよ、心配してくれてありがとう」

「でも心配だよ・・・この学校の保健室に行くなら一緒に行かない?あ、私の名前は櫛田桔梗だよ。下の名前で呼んでくれると嬉しいな。よろしくね」

心配した様子で、優しい口調で言ってくる彼女。

桔梗ちゃん、か。優しいな。でも、私のせいで迷惑をかけるわけにはいかないし・・・取り敢えず自分の名前を言ってから断ろうかな。

ごめんね、親切にしてくれてありがとう。そう言って貰えるだけで嬉しいよ

「えっと、私の名前は不留美 優だよ。私も下の名前で呼んで欲しいな。よろしくね桔梗ちゃん・・・それと、保健室の事なんだけどありがとね。でも、迷惑かけちゃうから大丈夫だよ。保健室は自分で行く事にするから。」

あまり心配かけないように笑顔で私は言った

「でも・・・」

私の言葉を聞いても尚、そう心配してくれている桔梗ちゃんは本当に凄く優しい子なんだと実感した

「では私が保健室へ送り届けてあげよう。」

すると突然、優先席に座っていた金髪の男が私達の会話に入ってきてそう言い、私をお姫様抱っこした

は?

「え、ちよ」

私は周りを急いで見渡すと、今この場にいる人達全員が此方に目を向けて驚いていた

待って待って。凄く目立ってる!!

「や、あの自分で歩いて行けるので大丈夫です。なので、下ろして欲し

いんですけど……」

これ以上目立ちたくないと思い、お腹の痛みに耐えて少し暴れるが直ぐに阻止されてしまった

「それは無理な話だねえ。任せたまえ不留美ガール」
えつと……

「私もこの人に運んで貰った方が良いと思うな。私じゃたぶん優ちゃんを運べられないと思うから……」

桔梗ちゃんは金髪の男に運ばれるのが一番良いと判断したのかすぐさま賛成して、私に申し訳なさそうに言ってきた

「え、桔梗ちゃん!？」

「また会おうね!」

そう言つて桔梗ちゃんは愛くるしい表情をしながら手を振つてくる

「それじゃあ、行こうとするかねえ」

は、えちよ、

そのまま私は謎の金髪の男に保健室まで運ばれることとなった

教室での出来事

皆さんこんにちはー

今私は先程会った人にお姫様抱っこされて保健室へ連れてこられました

どうして私を運んでくれたんだろう？優しい良い人なのかな？でも、バスでは優先席座席お婆さんに譲ってなかったから、そうではないのかな？後疑問なんだけどどうして私の名字知ってたんだろ。珍しい名字だと思うから当てずっぽで言ったんじゃないと思うけど。もしかして彼と会ったことある？

色々な疑問などが私の頭の中に浮かんだがやっぱりあの男の事はよく分からない。…分らないけどでも、いい人なのは確かだよね「それじゃあ此方に寝かせておいてね」

私が考え事をしている間に保健室の先生にそう言われて金髪の男は私をベツトに運んだ

そして金髪の男はゆつくりとできるだけ揺れないように、私をベツトに下ろしてくれた。その途中、まあ正確に言えば下ろしてくれている時に彼と顔が結構近くなった。…そして、こういうことに余り慣れていない私は少しびっくりしてめちやくちや恥ずかしくなった。まあ、それは置いといて…こういう気遣いをしてくれるなんてやつぱりいい人だな。と、私は改めて実感した

その時、保健室の先生はニヤニヤしながら爆弾発言を言ってきた「いきなり来てびっくりしちやつたけどお姫様抱っこなんで青春ね！君たち付き合ってるの??ねえねえ」「つ、付き合っていないです」取り敢えず変な誤解を招かないように即答しておいた

「あらそうなの？お似合いだと思うのに勿体無いわね！私だったらほっとかないのに〜！」

なんかこの先生、フレンドリーだな。

「えとあの」

「あ、そうだったわ。取り敢えずお名前を教えてくださいかしら？」
「不留美 優です」

「高円寺六助だ。以後お見知り置きを。ティーチャー」

「不留美さんに高円寺くんね、私はBクラス担当の星宮知恵です。よろしくね2人とも！あ、まだ2人ってクラス知らないんだっけ？」

「そうですね」

「すぐここに来たから知らないかな」

「ティーチャー、教えてくれないかい？」

高円寺くんがそうお願いすると星宮先生は何やら紙を取り出して見ていった

「そうね、ちよつと待っててね。えくと」

「楽しみだな。どのクラスだろう」

「2人は、お、2人共Dクラスよ！という事はさえちゃんのクラスか。うんうん。良かったじゃない！」

「そう言いながら先生は笑顔で私のほっぺたをツンツンしてくる。」

「というか、さえちゃんって誰かな？話の流れからして私達の担任の先生だよ。星野宮先生がさえちゃんって呼んでるって事は結構仲が良いのかな」

「後、思ったんだけどクラスって1組2組とかの数字じゃなくてアルファベットなんだね。なんかちよつと意外。」

「それより具合大丈夫？」

「そう思っていると先生が体調のことを質問してきた。」

「あ、急に学校来る途中にお腹痛くなっちゃっただけですので…たぶん直ぐ治ると思います。」

「まだ結構痛いけど、横になれて少し楽になったからもう少ししたら直るはず。…たぶん」

「そっか、それじゃあ取り敢えずお腹を暖かくして寝たら良いわ！まだホームルームの時間まで20分ぐらいあるから」

「20分、か。まだ結構時間あるな。よかった」

「そうですね。ありがとうございます」

「うんうん！それより学校行ってる途中で腹痛くなるなんて可愛いわね〜!!」

ニコニコしながらそんな事を言ってくる。

「…褒めてないですよね？」

「え、褒めてるわよ」

「そうですか」

なんか、あまり納得いかないけどまあいいや。

「それで、高円寺くんはどうする？ 不留美さんが回復するまでここに
いる？」

星野宮先生がそんな事を言ってきた

え？

「そうさせてもらうよティーチャー」

「え、えっと」

教室に行つてて良いのに

「それじゃあ後は若い2人でごゆつくり！ 私はちよつと行くところ
があるから具合良くなったらそのまま自分のクラスに行つて良いか
らね〜！」

そう言つて私にウインクをすると星宮先生はどっかに行つてし
まった

ちよつと待つて、なんで私にウインクしたの？

そう思いながらふと、高円寺くんの方を見ると彼はパイプ椅子に
座つていた

いつの間にパイプ椅子なんて持つてきたんだ。長い時間ここに
いるつもり満々じゃん。

取り敢えずここまで運んでくれたしお礼を言おうかな

「え〜とあの、高円寺くん？ だよ。保健室まで運んでくれてありが
とう」

「気にする事はないさ不留ガール。それより体調は大丈夫かい？」

「う、うん。さつきよりは良くなったよ。ありがとう。だから、えーと
先に教室に向かつてもらつて全然大丈夫、だよ？ これ以上高円寺くん
に迷惑かけたくないし」

初日そうそう私なんかと一緒にいるより教室に行つて友達作った
方が高円寺くんのために絶対なると思うし

「いや体調が悪い女性を1人にすることはできないねえ。気にする事

はないさ、私は好きでここにいるだけなのだから」

「そ、そっか」

不思議な人、だな……。まだ時間あるよね。どんなお話ししよう……。あ、折角だし疑問に思ってる事聞いてみようかな

「ねえあのさ高円寺くんって私の名前知ってたみたいだけど、どうして？もしかして私、高円寺くんと会ったことある？」

もし会ったことがあるなら申し訳ないな

「2年前に君と会ったことがあるのだが…。忘れられてしまってるみたいだねえ」

そう、少し哀しい顔をしながら彼は言った

2年前……。か。2年前は、あんまり良い思い出がないんだよね。その時、色々あったし……。もしかして、その時に会ったのかな？うーん

「無理に思い出す必要はないさ。というか思い出せないと思うからねえ。」

思い出せない？どうしてだろう

「ふっ、いずれ分かる事さ。」

私が考えていることが分かっているようにそんな事を言ってきた「分かった……」

思い出せるように頑張ろう

そして、しばらくするとお腹も痛く無くなってきた

だいぶ良くなったな。良かった、これなら時間に間に合いそう。

「具合、良くなってきたからそろそろクラスに行こうかな」

「そうか。では行くのでしょうか」

そういうと彼は立ち上がった。そして私もベットから降りてクラスがある方に歩いていった

えーとDクラスは……

「あ、あった」

なんか緊張するな… こういう時ってなんか緊張するよね。

「入らないのかい？」

私が教室に入らないでいる事に不思議に思ったのかそんなことを言ってきた

「あ、ううん。入るよ」

高円寺くんは全然緊張してたいみたいだな。まあ、高円寺くんって緊張しなさそうないメージがあるけど。というか、高円寺くんが緊張してる姿全然想像出来ない。

そう思いながらドアを開け、中に入っていくと高円寺くんもそれに続いて入ってくる

教室の中をぎつと見渡すと人が沢山いた。

えーと、席は…

「あ、優ちゃん！」

聞き覚えがある声があったと思い、声があった方へ振り向くとそこには桔梗ちゃんがいた

「桔梗ちゃん？」

桔梗ちゃんもDクラスだったんだ。なんだか嬉しいな

「うんっそうだよ！同じクラスだったんだね！嬉しいな、もう体調は大丈夫なの？」

心配そうに言ってくる桔梗ちゃん。この子、天使みたいな子だな

「うん、もう大丈夫だよ。あの時はありがとう」

「ううん、ごめんね。私は特に何も出来なかったから。でも、体調良くなっってよかった！」

そう言うと、今度は私の後ろにいる高円寺くんに視線を向けた

「君も優ちゃんを運んでくれてありがとう！」

「いや、気にする事はないさプリティガール。では」

そう言うとチラッと座席表を見て自分の席に座って行った

私も席に着こうかな。そう思って座席表を見ようとした時、桔梗ちゃんが先に座席表を見てくれたみたいで席を教えてくださいました

「えーと、優ちゃんの席は真ん中ら辺の列の… あの赤い髪をしてる

男の子の隣の席みたいだね」

「そっかありがとう」

そうお礼を言って私は自分の席へと座った

荷物を置いて取り敢えず誰かに話しかけようかなと思いいわりを見渡した

教室の席は殆ど埋まっついて各自好きなようにして過ごしていた

といっても殆ど皆誰かとお話をしてるみたいだね

乗り遅れた、かな。でも保健室に行つてたからしかたないか…

周りを見渡してたら隣の席の赤い髪の毛の人と目があった。すると、

「チツ」

凄い勢いで睨まれ、舌打ちされた

う、舌打ちされたけど…でもせっかく目があったしお話ししようかな

「ね、ねえ」

「あ？なんだよ」

凄い勢いで再び睨まれ、背筋がゾツとした

…… 中学校の隣の席の子もこんな感じの人居たな

この人と仲良く出来るかなあ。正直言つてちよつと怖い、不良みたいな人だよね… どうしようかな。でももう話しかけちゃつたし、それになんて呼べばいいかわからないから名前だけ聞こうかな

「え、えと隣の席同士今日からよろしくね。私は不留美優だよ。君の名前、もしよかつたら教えてくれないかな？」

「チツ、須藤健だ」

舌打ちされたけど名前教えてくれた。この人案外良い人なんじゃないかな？ 中学校の隣の席だった子は最初は名前全く教えてくれなかつたからね。うん、そう考えるとこの人めっちゃいい人だよ！

取り敢えず名前知ることができて良かった！これで何で呼べば良いかは解決だよね

「名前教えてくれてありがとう。これからよろしくね須藤くん。」
すると睨まれ& a m p ;舌打ちされた

うう、さ、流石に何度も睨まれたり舌打ちされたりするのは辛いかな…

そんな事を思っていると担任の先生と思われる人物が教室に入ってきた

「えー新入生諸君。私はDクラスを担当することになった茶柱左枝だ。普段は日本史を担当している。この学校には学年ごとのクラス替えは存在しない。卒業までの3年間、私が担任としてお前たち全員と学ぶことになると思う。よろしく。今から一時間後に体育館にて入学式が行われるが、その前にこの学校における特殊なルールについて説明しよう。今から資料を配布する。」

すると前から資料が送られて来た。

資料を見ると資料には色々な事について簡潔に書かれていた。

この資料、すごく見やすい。この資料作った人凄いな

「今から、個別端末を配布する。この個別端末には全ての施設を利用したり、売店などで商品を購入するためのクレジットカードのようなものが内蔵されている。ただしポイントを消費することになるので注意が必要だ。学校内で買えないものはない。学校の施設にあるものなら、なんでも購入可能だ。」

おお、『学校内で買えないものはない。』か。ということはポイントさえあれば何でも買うことができるってこと、だよな。凄いな

「それからポイントは毎月1日に自動的に振り込まれることになっている。お前たち全員、平等に10万ポイントが至急されているはずだ。なお、ポイントは1ポイントにつき1円の価値がある。それ以上の説明は不要だろう」

茶柱先生がそう言った瞬間教室がざわついた

私は急いで端末を操作して確認すると、本当に10万ポイントが支給されていた

凄い……、これってつまり今月は10万ポイント支給されるってことだよな。

「支給額に驚いたか？この学校は実力で生徒を測る。入学を果たした時点で、お前たちにはそれだけの価値と可能性がある。それはお前た

ちに対する評価の表れだ。遠慮なく使え。ただし、ポイントは卒業後には全て学校側が回収する。現金化などは不可能だから貯め込んでいても得にはならんぞ。ポイントはどのように使おうがお前たちの自由だ。仮に必要なと言うのであれば誰かに譲渡することも問題は無い。だがカツアゲのような真似はするなよ？学校はその手の問題には厳粛に対処する」

カツアゲ・・・それはダメ、だよ。気をつけよう

「何か質問はあるか？」

そう言いながら、茶柱先生は教室を一周見渡した

「質問は無いようだな、これで説明を終わる。では、よい学生ライフを送ってくれたまえ。くれぐれも入学式に遅れないように」

ふう、いきなり10万ポイントも支給されるなんて凄すぎだよ

でも、普通はこんな大金貰えるわけないよね、いくら国が運営してるって言っても。可笑しいなく。

という事は、何かこの学校に裏でもあるのかな？

というかさ、今月は10万ポイント貰えたけど来月は何ポイント貰えるのかな。来月貰えるポイントの額、先生言っただけでなくない？

そう思っていると好青年と言える男子生徒が声を発した

「皆、少し聞いて貰ってもいいかな？」

彼にクラス中の視線が集まっていく。すると彼はクラスを一周見渡した

「僕らは今日から同じクラスで過ごす仲間だ。今から自発的に自己紹介でもして一日でも早く皆が仲良く出来ればと思うんだ。入学式までまだ時間もあるし、どうかな？」

「さんせー！ 私たち、まだ皆の名前全然わかんないし」

他の何人かの生徒が賛成すると、それまで迷っていた生徒たちが次々に賛同した。

クラスメイトの名前、知れるから良いかな。ここで友達作ることができるかもしれないし！

「じゃあ言い出した僕から。僕は平田洋介。趣味はスポーツ全般だけど、特にサッカーが好きかな。気軽に洋介って呼んでほしい。よろし

く」

平田くんか。趣味がスポーツ全般って凄いな。それに、リーダーに向いてそうだな

そして、平田くんが続いて1人、また1人と自己紹介をしていた「俺は山内春樹。小学では卓球で全国に、中学では野球でインターハイまでいったけど、怪我で今はリハビリ中だ。よろしくう〜」

えーと、中学にインターハイなんてあったかな？たぶん無かったと思うけど…もしかしてウケ狙いの自己紹介なのかな。度胸があつて凄いな〜

「じゃあ次は私だねっ」

そう言い、元気良く立ち上がったのは私の体調のことを気にかけてくれた桔梗ちゃんだった

「私は櫛田桔梗と言います。みんなの顔と名前を早く覚えて友達になりたいなって思ってます」

桔梗ちゃんは愛くるしい笑顔で元気よくハキハキ自己紹介をしていく

「私の最初の目標は、ここにいる全員と仲良くなることです。皆の自己紹介が終わったら、ぜひ私と連絡先を交換してください」

凄い目標、流石桔梗ちゃん。大変そうな目標だけど、でも桔梗ちゃんならその夢直ぐ叶えられそう。

「それから放課後や休日は色んな人とたくさん遊んで、たくさん思い出を作りたいので、どんどん誘ってください。ちよつと長くなりましたが、以上で自己紹介を終わりますっ」

桔梗ちゃん、クラスの人気者になりそうだな。明るくて可愛いしそれに加えて優しいもん。

「じゃあ次——」

「俺らはガキかよ。自己紹介なんて必要ねえ、やりたい奴だけやってろよ」

そう言って立ち上がりながらそう言った後、須藤くんは自分の椅子を勢いよく蹴った

バンツ！ガンツツ！

いつつたあ！

視界がグニヤリと歪み、須藤くんが蹴った椅子が私に直撃したことが分かった

ガシャンッ！

そして、私の頭に見事ヒットした椅子は床に落ちた

そして私は反射的に頭を押さえ、自分の机に頭を伏せるような形になった

痛いって頭が少し熱くなるのを感じた

これは……ガチで、痛い……私の頭、死んだ？

痛くてそう思わずにいられなかった

椅子っていわば鉄だよ。鉄が勢いよく私の頭に直撃したっていう感じだよ……めっちゃ痛いんだけど。

凄い威力……私の頭、なんともなっていないと、いいけど……たんこぶできてないかな……

そう思いながら頭を頑張って上げて須藤くんを見ると流石にこんなことが起こると思っても無かったよう目で目を見開いて驚いていた。

クラスの皆もこちらを見て驚きながら固まっていた

たぶん、須藤くんは蹴った事によって椅子が誰かに当たるとは思っていなかったみたい、だね。軽い気持ちでストレス発散程度でやったんだと思うけど。まあそれは当たり前か、わざとだったらやばいもんね。私も椅子に当たるなんてびっくりだよ。とうとう椅子が頭に当たる日が来るなんてな……

にしても、須藤くん何かやってるのかな。凄い威力だったよ……そんな事を痛いなと思いつながら考えていた。

「ゆ、優ちゃん大丈夫!?頭痛くない?」

最初に再起動したと思われる桔梗ちゃんそう言いながら近づいてくる

めちやくちや痛い……なんかだんだん後から痛くなってきたな。

あと少し気持ち悪いし……

「ゆ、優ちゃん！聞こえてる?おーい！」

私の頭、歪んでないよね？ちゃんと丸だよ

「優ちゃん!？」

えあ… 桔梗ちゃん…

その言葉に初めてそばに桔梗ちゃんがいる事に気づいた

「あ、桔梗ちゃん…」

「ちよ、ちよっとこれやばいんじゃない!？」

「先生呼んで来た方がいいかな?」

クラスの誰かがそう言ったのが聞こえた

ツ…

「わ、わりい大丈夫か?」

かすかに須藤くんと思われる人がそう言ったのが聞こえた

このままだと、須藤くんが責められちゃうよね… 悪気はないみたいだし、謝ってくれたみたいだしね。

出来るだけ痛みを我慢して、私の得意な演技を――

ふう、

「だ、大丈夫だよ!ほらっ、ちよっとびっくりしちやつただけだから。特に痛みなんて無いし。心配かけてごめん」

私は出来るだけ明るく、ハキハキ喋った

「で、でも優ちゃんさっき私の声聞こえなかったみたいだったよ」

「それはたぶん、ちよっとびっくりしてぼーっとしちやつただけだからさ!心配しないで。ごめんね、無視しちゃって…」

「そ、そう?」

「うん。だから先生呼ばなくて大丈夫だよ。心配かけてごめんね。」

「う、うん…で、でも」

やば、めっちゃ痛い…。それに何か気持ち悪いよ…。吐きそう。取り敢えず、先生がいるところ…。職員室に行こう…。今日、ほんとに最悪な日だな…

「ごめん、ちよっとトイレに行ってくるね。」

そう言い、立ち上がって教室を出て行こうと歩いた

視界が歪んでくらくなる…。ちゃんと歩けてるのか不安だな…

そして、誰かの声が聞こえたような気がしたけど、それに答えてる

余裕はなく、そのまま教室を出た

その時、

「待て、不留美ガール」

高円寺くんらしき人が教室から出てきてそう言った

「高、円寺くん…?」

なんで?

「本当は頭が痛いんだろう。ちょっと失礼」

そういうと彼は私を本日2回目のお姫様抱っこをした。

え…

「職員室に行くつもりだったんだろう。連れて行く」

そういうと、彼は物凄い速さで走り、職員室までやってきた

私は、ギリギリ意識がある中で運ばれて行くのを感じた

ガラガラ

「失礼するよティーチャー」

「どうした?…高円寺と、不留美?」

「だ、大丈夫!」

職員室中の視線がこちらに向いているのを感じた。

「不留美ガールが頭を打ったのだが、星野宮ティーチャーはいるかね?」

そう言うと、ピンク色の髪をした先生がやってきた。えーと、確か… 星野宮先生だっけ…?

「大丈夫? 不留美さん、聞こえるかしら? 聞こえたら返事して」

「…はい」

「ちよつといいかしら」

そう言っつて先生が私の頭を動かしてどうなっているか見た

「…たんこぶが出来てるわね。病院に連れて行った方が良さそうだわ。」

そう言い、慌てる先生。

私はその先生の袖を掴んだ

「あ…の」

「どうしたの不留美さん」

「…わたしの… クラスの… ひと、たちに、わたしのことで、なにかいわれてもごまかして、ください」

視界が暗くなるのを感じながら必死にその事を伝え、私はブラックアウトした――

目覚め

ピピツ…ピピツ…

規則的な電子音が正しく聞こえ、ツンとする消毒液の匂いがする
まだはつきりしていない意識の中、私は重い瞼を開いた
すると視界にはぼんやりと白い天井が映った

「優ちゃん!?大丈夫?」

「大丈夫か?」

そして、少女と少年が私の顔を覗き込む

えっと…この容姿と声、少女の方は桔梗ちゃん、だよね。

でももう1人の少年は誰かはわからない…あ、でも確かDクラスの
教室にいた気がする。同じクラスの人、なのかな?自己紹介、最後まで
聞いてなかったから名前は分からないけど…

とにかく、返事をしないと。

そう思いながら私は唇を動かした

「き、きよ、ちゃ」

だけれど、喉がカラカラになっており掠れた声しか出なかった

そしてその事に気づいた桔梗ちゃんが素早くストロー付きの水が
入ったコップを私の顔の前に近づけた

「取り敢えずこのお水飲んで!」

そう言いながら、ストローの口を私の口につける

私は聞きちゃんに申し訳ないと思いつつも取り敢えずお水を飲
んだ。

「ふう、ありがとう。桔梗ちゃん」

「優ちゃん3日も目が覚めなかったんだよ。心配したんだからね。…
でも、目が覚めて本当によかった…!!」

少し涙ぐみながら嬉しそうに微笑みながら彼女はそう言った。

3日も寝てたんだ…有る意味凄いな。

「心配かけちゃってごめんね。ありがとう」

「ううん、…あ、そうだ!私、優ちゃんが目を覚ましたこと看護師さん

に伝えてくるね！色々聞きたいことがあると思うけど…それは綾小路くんに聞けば答えてくれると思うから！」

そう言うのと、すぐ戻るね！と、最後に一言言い病室から立ち去ったすると自然と少年と目が合う

…えーと、今この場には私と少年以外誰もいないからたぶん、桔梗ちゃんが言ってる綾小路くんって今日が合ってる彼のことだよな。

そう思いながら私は引き続き彼を見ていると彼も私を見てくる。

その状態から数秒程経過して沈黙の状態が続いた

…これは、えーと話しかけて良いんだよね？何か話しかけずらそうなおーラがするんだけど…

それにしても綾小路くんって無表情だね。数奇からずっと表情に変化が無いよ？何を考えてるのか全く分からない。でもいいなあ、綾小路くんババ抜きとか強そう。

…それに、綾小路くんって何かめちゃくちゃ頭良さそうな顔してる。

私がそう思っていると、彼が口を開いた

「あー、俺は不留美と同じクラスの綾小路清隆だ。よろしくな」

あ、やっぱり同じクラスだったか。よかったー！これでクラス違かったら私は知ったかぶってる人になってたよ。

「あ、やっぱり同じクラスだったんだ。なんか見覚えあるなーって思ってたから。こちらこそよろしくね綾小路くん。…それと、聞いたことがあるんだけどいいかな？」

「なんだ？」

「私のこと、皆に何て言ってる？倒れて病院にいること知ってたりする、かな？」

私が最後意識を手放す前に先生に言った言葉、聞こえてたら良いんだけど…。須藤くん、大丈夫かな

すると、綾小路くんは淡々と私の質問に答える。

「否、不留美が思っているようなことにはなっていないぞ。一応表向きには風邪で寝込んでるっていうことになってる。この事を知ってるのは教師と須藤と、高円寺と俺と櫛田だけだ。…だが、教室で起こっ

た出来事は防犯カメラに映ってたから教師も須藤が蹴った椅子が不留美の頭に当たったという事については知っているみたいだぞ。：たぶん後で話を聞かれると思うが」

「そっか：うん、わかった。教えてくれてありがとう」

防犯カメラ：そんなものが教室にあったんだ。：でもそれじゃあ、ずっと私達の行動監視されてたってことだよな？：びっくりしたな。普通教室に防犯カメラなんて無いと思うんだけど：でもまあ、政府が運営してる学校だからそれが当たり前なのかな？

：でもそれなら有るなら有るって言って欲しいよ。教室に防犯カメラあること気づいてる人何ているのかな？

って、あれ？ちよつと待って。クラスの皆に知らされてない事をどうして桔梗ちゃんと綾小路くんは知っているんだろう。あの場に居て私を職員室まで運んでくれた高円寺くんと椅子を蹴った須藤くんはわかるけど、いつ知る機会があったんだろ

そう思っていると、私の考えている事が分かっているみたいに綾小路くんは言葉を発した

「俺と櫛田がどうして不留美が倒れて病院にいるのかを知ってるかと言うと、高円寺が櫛田に状況を説明してクラスの奴らが騒ぎ立てたりしないようにフォロワーして欲しいと相談して来たんだ。」

ああ、なるほど。そういうことか。それじゃあ桔梗ちゃんと高円寺くんに感謝しないとな

「そうなんだ：それで綾小路くんはどうして？」

「：俺は櫛田と高円寺がその会話をしている所を偶然聞いてな、それで知ったんだ」

淡々と無表情で話す綾小路くん。

「ふうん、偶然、ね」

私は納得したように思わずポツリと言った。確かに良くあることだよな、偶数って。私なんて偶然で1日に2回も鳩の糞落ちてきた事あるし。

「へえ、そうなんだ。綾小路くんにまで迷惑かけちゃったね。でも、ありがとう。皆に知られてたらきつと須藤くんが教室に入れづらく

なつてたと思うから。…後で高円寺くんにもお礼を言わないとな」

「ああ。…そういうえば高円寺、先程までお見舞いに来てたんだぞ。正直言つて高円寺がお見舞いに来るとか、不留美を職員室まで運ぶとかそういう事はしないやつだと思つてたから少し意外だったが。…不留美は高円寺と以前からの知り合いだったのか？」

高円寺くん：「お見舞いにも来てくれたんだ。…ますますお礼を言わないといけないな。」

それにしても流石綾小路くん。鋭いところ突くね。

私は綾小路くんの質問に答えた。

「うーん、それが正直言つてわからないんだよね。あ、2年前に会ったことがあるつて言つてただんだけど思い出せなくてさ」

「…そうか」

綾小路くんがそう言うと、

ガラガラ

ドアが開いて桔梗ちゃんと看護師さんとお医者さんが病室に入つてきた

「遅くなつてごめん！ちよつとバタバタしてたみたいで連れてくるの遅くなつちやつたけど連れてきたよ」

「ありがとう」

私は桔梗ちゃんにお礼を言い、先生の診察を受けた。

そして、綾小路くん達と話してから約3時間程経つた頃、須藤くと茶柱先生、それから星野宮先生が病室に来ていた。

「具合は大丈夫か？不留美」

無表情で淡々とそう言う茶柱先生。

「はい、検査の为一応2日ほど入院するそうですがとても元気ですよ」
ニコリと微笑みながら元気アピールをしていると、バツと私の目の前に星野宮先生が現れた。

「もう、心配したのよく？入学式前に保健室に来て、具合良くなって教室に行つたと思つたら今度は頭を打つて職員室にくるんだもの。私もうびつくりよ！」

明るく手を広げてそう言う星野宮先生。

確かに、星野宮先生にしてみれば入学前に保健室に来るだけでも極稀だと思うのに、更に入学式後に頭打ってくるなんて絶対に想像つかないと思うな。

私も全く想像つかなかったしね。

「すみません、何度もお手数かけてしまつて。」

私が星野宮先生に向かってそう言うと、先程まで黙っていた須藤くんが申し訳なさそうに口を開いた

「不留美、その…すまねえ」

「気にしてないから大丈夫だよ、須藤くん」

心配をかけないようにそう言うと、茶柱先生が一步前に出た

「目覚めたところ早速で悪いが不留美、教室での出来事は防犯カメラの映像を見て知っているが一応の確認だ。須藤が意図的に椅子を蹴り、それが不留美の頭部に当たつたで間違いないか？」

…まあ、一応間違つてはいないけど…

そう思いながら私はチラッと須藤くんを見た。

すると、彼は納得が行つてないような表情をしていた

「…意図的じゃねえよ、少し足で椅子を叩いただけだ。不留美に当たつたのも偶然だぜ」

そう須藤くんが言つた瞬間、茶柱先生がニヤリと笑つた。

「ほう、偶然、か。確かにお前は軽い気持ちでやっただけかもしれない。しかし、実際には不留美の頭にお前が蹴つた椅子が当たつたのは事実だ。事実がある限り偶然で済まされる問題ではないのだ」

その言葉に、星野宮先生も便乗する形で乗つた。

「そうよ、残念ながらこれはね、偶然なら仕方ない、で済まされる問題じゃないの。彼女は3日も意識を失っていたもの。須藤くん、貴方は退学になるかもしれないのよ?」

「!…退学……」

星野宮先生の言葉を聞いた瞬間、須藤くんは大きく目を見開いて呆然そう呟いた。

私はその須藤くんの姿を見て、少し感心した。

須藤くん、ちゃんと反省してるんだな。

私が彼に名前を聞いたときや自己紹介の時の彼からの様子を見るに、前までの彼だったら此処で何の躊躇いもなく反論していたと思う。

退学なんて冗談じゃない、とか、もしくは暴れ回っていたかもしれない。自己紹介を断って椅子を蹴った時みたいにな。

でも、今はそれらしき様子は見あたらない。俯いて黙ってはいるけど、決して暴れる様子は見受けられないのだ。だから、少なくとも少しでも反省している、申し訳ないと少しでも思っているんだと思う。そう思っていると、茶柱先生が私に追い討ちをかけるように言ってくる。

「そうだな。それ相応の処罰は受けてもらうぞ。：それで不留美、私 が先程言った事に間違いはないか？」

：やばい。どうしよう、このままだと須藤くんが危険だ。私の言葉で彼のこれからの運命が決まってしまう。少し甘かったな。：どうしよう

「：不留美、助けてくれ。：俺は、俺は謝ったんだ。此れからは気をつける。だから助けてくれ」

そう必死に私に頼み込んでくる。そして教師2人はその様子を見たままなにも言わない。

：私は、須藤くんを許したい。確かに須藤くんは椅子を蹴って私の頭に当てた。でも、悪気が無かったのは知ってるし謝ってくれた。

それに、全て須藤くんが悪い訳じゃない。だって、あの場所に座っていた私にも非はある。大前提にまず、私があそこに居なければ椅子は当たらなかった。

そして、きつと私が3日間も意識不明で入院してなかったら須藤くんに処罰を受けられる、とか、そういう話にはまずならなかった筈だ。：この学校に入ったら何か変わると思ったのに。やっぱり不幸なことは起きてしまう。しかも今回は、否、今回も周りの人を巻き込んでしまった。

私は罪悪感で胸が一杯になり唇を噛み締めた。

…後悔は後だ。その前に須藤くんの処罰の事をなんとかしないと。でも、例え私が許したとしても、須藤くんの処罰が軽くなるかどうかはわからない。何故なら、私が3日も意識不明で入院しちゃってるから。…でも、策はあるよ。一応ある。須藤くんが退学にならない方法はわかる。

でも、もし私がそれを実行して行ったとしても須藤くんの根本的の部分が直るかどうかは分からない。

須藤くんの最大の短所を直すには…

「…茶柱先生、その解答する前に須藤くんと少し話がしたいです。」
「ほお？いいぞ」

不適な笑みを浮かべながらそう言う。

茶柱先生の言葉を聞いて私は須藤くんに質問を投げ掛けた。

「…ねえ、須藤くん。須藤くんはどうして椅子を蹴ったの？」

「…んなのむしゃくしゃしてたからだ」

「なるほど、そっか。むしゃくしゃして、モノにあたったと。…じゃあさ、もし、本当に今回のことで須藤くんが反省してるのなら、此からは感情の任せに行動しないで。じゃないと、一番最後に後悔するのは須藤くん自身になっちゃおうよ。それは今回の事で良くわかったはず。」

私は須藤くんの目を見ながらそのまま話を続ける。

「でも、それを直すのにはたぶん相当の努力がいると思う。須藤くん自身が耐えなくちゃいけないから。それはきつと、簡単なことではない。その気持ち、良くわかるよ。私も、私もそうだったから。私もそんな時期があったから。」

最後の、『私もそんな時期があったから』その言葉を言った時、須藤くんは少し動揺した。

「…もし、何か耐えられなくなったら、耐えられなくなる前に誰かに、私に相談して。必ず須藤くんの力になるから。少しで良い。少しで良いから感情を抑えてみて。そうすればきつと、毎日が楽しくなるはずだから」

「…もしよかったら約束してくれるかな？感情任せに行動しないっ

て。…もし絶対にしないって約束してくれるのなら、須藤くんが退学にならないように必ずしてみせる」

…私のこの最後の言葉は、悪く言うと言脅しになるかもしれない。退学になりたくなければ私と約束をしろ、という脅しになるかもしれない。

私の言葉を聞いた須藤くんは、少し考えながらも答えを出してくれた。

「……………ああ。わかった。約束するぜ、もう感情任せに行動しない」「そっか、ありがとう。じゃあ、ちゃんと約束守ってね？守らなかったら許さないよ？」

「ああ。勿論だ」

私はその言葉にニコリと微笑むと、茶柱先生達の方へ向いて言葉を発した。

「…茶柱先生、先程仰っていたことですが、間違っています」

「…なに？」

「須藤くんはただ、椅子を蹴ってしまっただけです。良くありますよね、わざとではなくてうっかり椅子に足が当たってしまったこと。…須藤くんがしたのはただそれだけですよ？」

「いや、だが」

「怪我した私がそう言っているんです。怪我をしてしまったのは私が不注意で自分から椅子に当たってしまった、つまり自業自得というだけですよ。…このようなこと、特に問題にはなりませんよね？」

…あの場の出来事は茶柱先生達の言動から見るとしっかりと防犯カメラに記録されていたはず。それにあの現場はクラスメイト全員が目撃している。だからわざわざ3日間も意識不明だった私に確認を取る必要なんてなかった筈だ。

だからたぶん、この学校は——

私がそう思っていると茶柱先生が突然笑い出した。

「はははっ、お前は面白いな。そうだな、怪我をした本人であるお前がそういうならそうなんだろう。…よかったな須藤」

「本当にそれで良いの？不留美さん。貴女は怪我をしてるのよ？」

「そこまでだ。本人がそう言っているのだからそうなんだろう、これ以上我々教師が加入してはいけない」

「…そうね」

ふう、これで須藤くんは処分されないだろう。よかった。

「それじゃあ、我々はこれで失礼する。…行くぞ星野宮」

「えー、私はもつと不留美さんとお話したいもの！さえちちゃんは先に行つて良いわよ〜？」

「ダメだ。この後報告があるだろう。行くぞ」

「ちえ、わかったわよ。じゃあね、不留美さん。今度また会つたらじつくりとお話ししましょ！」

そう言つて2人は病室から出ていった。

すると、須藤くんが私に近づいてきた。

「…不留美、ありがとな。色々…」

「うん、その代わりに約束忘れないでね！」

「おう、…そうだ、俺もこの後部活あるから行くぜ」

部活…ああ。確か入学式の次の日に部活紹介があつたんだっけ。行きのがしちやつたな。でも特に部活に入るつもりは無かつたから良いんだけど。

「部活何処に入ったの？」

「バスケットだ。バスケットだったら誰にも負けないぜ？小さい頃からバスケット一筋やつてんだ」

楽しそうに話す須藤くんを見てすごくバスケットのことが好きなんだなと思つた。

でも、なるほど。だからあんなに椅子の威力があつたのか。…でも、羨ましいいな。何か1つの事でも夢中になれるなんて。

「…へえ、そうなんだ。凄いね！部活頑張つてね、バイバイ」

そう私は手を振りながら笑顔で言い、須藤くんを見送つた。

〇〇〇

はあ、これでよかつたのかな…

実はあの時、須藤くんの短所を直す方法を考えていた時、もう一つ

有る案が思いついていた。

そっちの方が遥かに効率的で、先程実行した案よりも余程良いものだった。

でも：あの場には先生がいたから。

あの場でそれを実行すると絶対にあの2人の先生の中で要注意人物になっていたかもしれないから。

出来るだけ目立ちたくないから。それに――

私は、やり過ぎると絶対に最悪な状況がもつと最悪になるから。

だから、それは実行しなかった。

：須藤くん。君はちゃんと、正しい道に進んでね。絶対に、私のようになっちゃ駄目だよ。

私は、小さい頃のある出来事を思い出しながらそう思った。